

関西支部勉強会レポート

第 28 回関西支部勉強会

フィールドサイエンスと医療政策－1930 年代のハンセン病疫学の営み－

日時 2013 年 2 月 12 日（月） 18:00-20:00

場所 大阪大学 全学教育推進機構総合棟 1 2 階 セミナー室 2

ゲスト 廣川 和花 氏（大阪大学適塾記念センター 准教授）

人数 11 人

今回の関西支部勉強会は、大阪大学での開催でした。冷たい雨が降る中、学生から大学の教職員まで、いろいろな分野の 11 人が集まりました。

今回は、お話の目次を記録用レポートに挙げておきます。

お話の目次：

イントロダクション

- （1）ハンセン病とは
- （2）日本のハンセン病問題と歴史研究
- （3）報告者のこれまでの研究
- （4）疫学？

今日のテーマ：

- 1) フィールドサイエンスとしての医学：実験室医学や臨床医学とは異なる手法、対象をもつ医学の導入
- 2) ハンセン病医学の果たした政策的役割：何が問題だったのか？
→日本のハンセン病医学者が、1930 年代に地域社会におけるハンセン病の実態をみるために導入した疫学（フィールドの医学）とその調査結果が、どのような医学的・政策的展開を遂げ、総力戦期日本のハンセン病患者の処遇に帰結するのか

1. ハンセン病法制と「資力」概念の変遷

関西支部勉強会レポート

- (1) 近代日本のハンセン病関連法制
- (2) 内務省一斉調査による患者数と実態の把握
- (3) 一斉調査への不信

2. 日本のハンセン病疫学の歴史

- (1) ハンセン病統計学のはじまり
- (2) 1930年代における疫学調査の方法論的發展
- (3) 病者収容と疫学

3. 農村から都市へ

- (1) 農村におけるハンセン病疫学調査
- (2) 都市における調査

4. 疫学調査から「検診」へ

- (1) 国立癩療養所星塚敬愛園の「検診」活動
- (2) 調査の概要
- (3) 敬愛園医官らによる調査・検診の傾向

結論

科学コミュニケーション研究会 関西支部有志
第28回 運営担当：東島 仁（大阪大学）、水町 衣里（京都大学）